
月と『名無し』と『病院』と

呉武鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月と『名無し』と『病院』と

【Nコード】

N2183I

【作者名】

呉武鈴

【あらすじ】

全てを無くした少年が一癖ある『病院』の面々と織りなす毎日。今日も賑やかに過ぎていく時間。そんな日常が長く続くと信じて…

月と『名無し』と『病院』と

『病院』の屋上で俺は月を見ていた。消灯時間を無視してピッキングで開けたドアをくぐりコンクリートパネルが敷き詰められた地面を歩き体重を思いきりかけたなら折れてしまいそうなほど錆び付いたボロボロの柵に軽くもたれかかりながら山に囲まれて眠る町を遥か遠くで見下ろしている星々とは一つだけ違う丸い月を見ていた。

「おい、坊主。そろそろ戻ってこい」

踊り場の方から同じ病室に入院している志村さんが戻るように催促してきた。

「今戻りますよ」

「おっ？」

素直に従うと志村さんは意外そうな顔で話しかけてくる。

「俺の言うことを素直に聞きたあ、いったいどうゆう風の吹きまわしだ？」

「たまには素直になるのもいいかなと思って」

「オメエらしくねえ」

「…そうですね」

同意しながら階段を降り、病室への帰路に着く。人ひとり居ない静まりかえった廊下を二人で歩き窓から月が見えるたびに足を止め一瞥する。正確には俺が不意に止まるのだが志村さんも俺の癖を知っているのと同じように立ち止まり月を見る。

「しかし何で毎日のように月を見に行くんだ？」

「あれ言ってなかったですか？」

「多分また『忘れ』ちまった」

「そうですか…」

志村さんは病気だ。まあ入院しているんだから当然だが一般的な病気ではない。彼は『物事を忘れてしまふ』病気だ。アルツハイマーのように少しずつ全てを忘れていくのではなく、唐突にある一部分

だけ記憶を無くしてしまうのだ。それゆえに生活に支障をきたし、ここに入院することになったのだ。

「俺は記憶喪失なんです」「それは知ってる」

「自分の名前も思い出すことすら出来ないのに一つだけ憶えてるんです。俺は満月の夜に人を――親友を殺してるんです」

「……」

「前の俺は『ここ』にはいないけど、その思い出が今と昔で共有出来るただ一つのことだから忘れないように毎晩月を見てあの光景を思い出すんですよ」

「まあ……人それぞれか」

人工の光が消え闇にのまれた渡り廊下を歩く俺達を月の光が微かに照らす。

そして今日も夜は更けて何事もなく明日の陽は昇る

……なんてことはなかった。

「呑気に月なんて見ちゃって」

「「っ!？」」

不意に後ろから聞きなれた声がした。それだけで体に刻み込まれた恐怖が腹の底から這い出てくる。ゆっくりと顔だけ振り向けばそこには満面の笑みを浮かべながら怒気を全身から漂わせてる看護師である金森さんが仁王立ちしていた。

「今何時か分かってる？」

とつくに消灯時間は過ぎてるのは分かる。

「ちなみにこれで何度目？」

それは分かりません。

「…で、覚悟は出来てるんでしょうね？」そこで気づいた。隣にいたはずの志村さんの姿がないことに。

「僕だけですか？」

「志村は逃げたから倍ね」

そこだけは納得したが全くどうしようもない。

「…お手柔らかにお願いします」

「却下」

満面の笑みで即答された。

—ああ神よ…俺に慈悲を…

そのあと小一時間ほど『罰』を受けたがそれは別の話。

薬と『蜜柑』と『お姫様抱っこ』と

「ただでさえ嫌な薬物投与も下手な看護師がやれば何度も針が腕に刺さる」

腕に開いた穴と目の前の注射器を交互に見つめながらぼやく。

「何で俺がこんな仕打ちを受けないとならないんですか？」

「『検査』のためだよ」

そう言いながら不良看護師の田口さんが四回目の投与を試みていた。

「〜！」

「…あつ」

「何ですかその声？」

「ゴメン、またミスった」

正確に言えば田口さんは看護師ではない。元よりここも『病院』と呼ばれるが体制が似ているだけで外来の診察や重傷者などの受け入れは全くしていない。

ここは肉体的、または精神的に何やらの異常性―日常生活に支障をきたした人間を保護、そして観察するために造られた実験施設だ。

「そろそろチェンジお願いしたいんですが」

「待て！次こそ成功させてみせる」

そう言いながら注射器を掲げる田口さんはどうしても信用出来なかった。

「田口ちゃん、リラックスリラックス」

「いいですよね。志村さんは自分でやれて」

「『何で』出来るか分からんけど『どうすれば』出来るかは分かるからな」

全く…この人の收容前は何をしていたのか。

そう考えてると不意に腕に痛みを感じた。

「おっ、よし、やった」

田口さんの声からして本日四回目の挑戦でやっと成功したのだろう。

「これでやつと次の仕事に移れるよ」

さいですか。

「まあいつも言ってるけど副作用がきつかったらちゃんとボタン押せよ」

わかってますよと返すと満足したか鼻歌まじりで台車を押して次の部屋に向かつていった。

「…さて、遊びにいきますか」

「待て、俺が検査に行ってからにしろ」

「なんでですか？」

「それまで心細い」

「……」

子供ですか。まあある意味では志村さんの相手は面白いから文句はないが。

「何時からですか？」

「10:00からだ」

備え付けの時計で現在時刻を確認すれば短針は9を、長針は4と5の間をさしてる。

「…そうですね、じゃあポーカーでもしますか」

「二人だけじゃつまらんだろ」

「大丈夫です、ちよつと外します。すぐに戻ります」そう言いながら立ち上がり部屋を出る。そしてすぐ隣の個室のドアをノックして中から返事がしたのを確認してからドアを開けた。

「おはよう、蜜柑^{みかん}」

「おはようございます」

いつも通り、ベッドの上でハードカバーの本を広げていた嘉島蜜柑^{かしまいかん}は入室者が俺であることを確認すると本を閉じ、礼儀正しい口調で挨拶をしてくれた。

「悪い、途中だったか？」

本を読んでいたのを邪魔しては流石に不味いだろうと思って言うが蜜柑は「いえ」と言いながら手を顔の前で軽く振った。

「丁度、章が変わったところだったので気にしないでください」

まあ本人が言うなら気にしないでいいんだろう。

「それで今日はどんな用事ですか？」

「蜜柑と遊ぼうとしたら志村さんが検査の時間までいてくれて言うから――」

「私に同席してほしいんですね」

話が早くて助かる。

「その通りだ」と言うとき蜜柑は微笑みで返してきた。

「まるで子供みたいですね」

「全くだよ。自分が寂しいからって俺の邪魔をするなんて」

言い終わると同時に蜜柑が軽く笑いだした。何かツボに入っただのか？

「二人ともですよ」

その言葉の意味が分からず首を軽く傾げると蜜柑は笑いながら言った。

「『名無し』さんも私と遊びたいから誘ったんですよ」

…確かにそういうことになるな。そこまで意識してなかったから、蜜柑の言葉に照れてしまう。

「と、とりあえず行くか」

照れ隠しのように少しどもりながら掛布団を退かす。そしてそのまま蜜柑が抱きつけるようにベッドに腰をかけた。いつものように首に手を回し、しっかりと捕まる蜜柑の体を支えた。いわゆるお姫様抱っこというやつだ。

勘違いされないために言っておくが蜜柑には足がない。先天的なものではなく、自ら足を切り落としたらしい。詳しいことは知らないが、それ以上はプライバシーに関わることなので聞かないことにしている。

嘘と『ほのか』と『左フック』と

「王子様に抱えられてお姫様の登場だ」

病室に入った俺達を見て、志村さんは第一声でそう言った。

「茶かさないでください」

一応返答しておくがはたから見たらその通りだろう。蜜柑の抱え方がお姫様抱っこなのは事実なんだし。

ニヤニヤとしている志村さんを視界からわざと外しながら蜜柑が安定して座れるように背もたれがある椅子を志村さんのベッドの近くに動かし、座らせる。俺と離れるときにちよつと名残惜しそうな顔をしたのは気のせいだろう。

「さてと、役者も揃ったし…蜜柑、ポーカーでいいよな？」

「勿論ですよ」

いつも通りの笑顔で蜜柑が言う。

突然だが人間には誰しも特技がある。スポーツが得意だったり、5桁の暗算が出来たりetc…

蜜柑の場合それが『トランプ』なのだ。

「今日こそ負けねえぞ」

「そうですか」

絶対の自信をもった顔で志村さんを見る蜜柑。まるで肉食獣が獲物を前にして舌なめずりしてるように見えるがいつものことなので気にしない。そしてゲームは始まった。

過程を話すのも面倒なので結果だけ言おう。

今回も蜜柑の一人勝ちだった。しかし手がスリーカード以下にならないってどういうことだよ。

「次は負けねえからな！」

捨て台詞と共に検査に向かった志村さんを見送り蜜柑を部屋に帰すために抱こうとするが

「私…用済みですか？」

と目に涙を浮かべ、上目使いで言われてしまった。

…言葉だけ聞けば俺が悪役だな。

「いや…そうじゃなくて…」

「私とはただの遊びだったんですね…」

うん。事実だけどニュアンスが絶対違うな。言い回しが悪すぎる。そこでさっき蜜柑が読書していたのを思い出す。

「蜜柑…さっき読んでた本、どんな内容だったんだ？」

「ドロドロの三角関係の末に起きた監禁事件です」

…だからか。

「死ぬまでに一回は言ってみたいですね」

「…それはないな」

「え…？どうしてですか？」

蜜柑が抗議の声を上げるが俺の考えは変わらない。

「…じゃあ泣いちゃいますよ？」

…マズイ！ここで泣かれたら間違いなくヤツが飛んでくるだろう。

「ふえ…」

「待てっ！俺が悪かった！だから…」

「嫌です」

ニツコリと笑いながら俺の懇願を断るとすぐに泣き顔になり

「ふえ…ん…ん…ん！！」

ワザとらしく大声で泣いた。

大急ぎで口を塞ぐが既に遅かった。直後、どこかの病室のドアが乱暴に開けられた音と廊下を走っている音が聞こえ、十秒もしない病室のドアが開けられた。

「どうしたの、蜜柑！？」

そこにいたのは短く揃えられた金髪をもった少女―進藤ほのかだった。ほのかがここにいる理由は患者は誰も知らない。ほのか自身も

語らないし、それぞれが他人に聞かないのは暗黙の了解になってるから誰にも分からないのである。

少し彼女について説明しよう。今の流れを見てわかるように彼女は心底蜜柑を『愛』している（友情ではなく性的にだ）。普段は誰にでも好かれる性格をしてるが、優先順位は蜜柑が一番である。

さらにここで現状を確認してみよう。

まず一番初めにほのかの目に入っしたのは『涙目の蜜柑の口を押さえ付けてる少年』である。

先ほどまでのことを知らない人間が見たら間違いなく少年が悪役だろう。

「…誤解だ、と言っても無駄なんだろうな」

「当然よ。たとえ誤解だとしても蜜柑に何かしている時点でアンタは有罪なのよ」

その後、顎に左フックを一発をもらい薄れゆく意識の中、最後に見たのは恍惚とした表情でベッドに場所を移し蜜柑に覆い被さるのかと本気で泣きそうな顔になっている蜜柑の姿だった。

昼食と『双子』と『包帯』と

眩しさに目を開けた俺はとりあえず時間を確認するために部屋に備え付けてある掛け時計を見た。

—うわぁ…もう昼飯の時間終わってるよ。

特別な事情—蜜柑みたいに歩けなかったりする患者以外は自ら昼食を取りに行かなければならず、十分以内に行かなければ全て片付けられてしまう。

コンコン

誰かが病室のドアをノックした。同室の志村さんがするわけないし、俺の『検査』は今日はない。全く心あたりがつかないがとりあえず「どうぞ」と言い、許可をする。

「ヤッホー、『名無し』！調子はどうだ！？」

「兄様、もう少し静かになされたほうが…」

ドアを開けて入ってきたのは異様に元気で包帯で口以外は隠している少年とそれとは正反対に気弱そうな声をした『病院』指定のパジャマを着た少女だった。

「…最悪だよ。朝からほのかに寝かされて今しがた目が醒めて頭痛いのに、大声で話す擻^{けやき}が来たからな。唯一の癒^{あおい}しは葵がいることだな」

「そんだけ喋れるなら元気だな」

ニヤニヤしながら言う擻に対して葵は何やら耳を赤くしてうつむいている。

「それで何の用だ？」

コイツが何も考え無しに動くことは有り得ない。こんな奴でもいつも何か人のために動いて自分が損しても全く気にしないことはここに来て一ヶ月で良く分かった。思えば入院して一番初めに話しかけ

てきたのも欒だった。…まあかなり厄介なことも引き付けてきたが。
「いんや、俺は無いぜ。葵はあるみたいだけどな」

「葵が？」

一瞬ビクツとして逃げだそうとしたが先回りした欒によって逃走経路を塞がれ涙目になりながらも覚悟を決めて俺の前にくる。

「あの…」

「どうした？」

うつむきながら話すので小声で話す葵の声は正直、聞きづらい。それを解消するためにいつも覗き込んで逃げられる。だが今日は違う。いつもの俺ではない。

「…葵」

「は…ふえ！？」

俺の呼び掛けに反応して顔を上げた瞬間を狙って俺は逃げられないように肩をしつかり掴み、出来るだけ真剣に話を聞くために葵の顔を見る。

「用事ってなんだ？」

「はわわわわ…」

顔を真っ赤に染めてあたふたと逃げ出そうとするが俺の手のせいでそれは叶わない。

「大丈夫か？」

だが流石に慌て過ぎだろうと思い一応聞いてみる。

「はははい！だいじょ…うぶ…で」

結果最後まで言えずに気絶してしまった。

—ぬう、いきなり過ぎてびっくりさせてしまったか

「…『名無し』、お前ワザとやってるだろ？」

呆れ顔—まあ見えないが声色的にそうだろう—で言う欒の言葉を俺は本気で理解出来なかった。

「まあ…面白かったからいいか」

「なんだそりゃ？」

「『名無し』は知らなくていいことさ」

「さいですか。ところで葵の用事してんなら教えろ」

「気絶していて昼飯食ってないだろ。そう伝えたら『じゃあ私はもう食べれないから渡しに行く』って言いだしてなオレは渋々ついて来たってわけだ」

櫂の指差した先―廊下に置いてあるベッドの上に全く手のつけない昼食のトレーを見つけた。

葵は俺が昼食を食べれないだろうというだけで自分の分を譲ってくれた。他人のために自分を犠牲にしたのだ。

「目が醒めたら『ありがとう』って伝えてくれ」

「自分で言わないのか？」

「直接いったらまた気絶しかなないだろ」

俺のその言葉に櫂は一層愉しそうに口を歪めた。

「お前やっぱリワザとやってるだろ」

煙草と『主治医』と『盗み聴き』と

夜、懲りずに俺は消灯時間を過ぎてから月を見に行っていた。いつものように周りの気配に注意しながら屋上に続く階段まで一人で―いつもなら志村さんがついてきてくれるのだが今日に限って「眠いからパス」と言ったので―歩く。

目的のドアについていつも通りピッキングをしようとするが

「…開いてる？」

手応えが全く無いことを疑問に思いながらドアノブを捻ると油の挿してないドア特有の音を発^たてながら開いた。

「おや、キミは確か…『名無し』君じゃないか」

不意に上から渋い男の声が降ってきた。見てみれば無精髭^{ぶしやうひげ}にボサボサの髪、くわえ煙草にヨレヨレの白衣をはおった男性―主治医の柿^{かき}谷^{たに}嵐^{らん}が貯水タンクの上から俺を見下ろしていた。

「こんな時間にどうしたんだい？ 確か消灯時間はとくに過ぎていたと思うが…」

暗くて表情まで見えないが声の調子から多分いぶかしげな表情をしてるだろう。

「日課の月見ですよ。そういう先生こそ何してるんですか？」

「ボクかい？ ボクは煙草を味わいにね」

肩をすくめながら「最近院内で吸ってたのがバレてね」と言う。

「『名無し』くん。今日は見逃すけど今度こういう事してるの見たら躊躇^{ちゅうちゆ}わず金森さんに報告しちゃうからね」

中腰になって笑いながら言う先生に思わず溜め息が出る。

出来れば言いたくなかったけど報告されるのだけは避けたいのだ。

「その場合先生がここで煙草吸ってたことを金森さんにばらします」

「勘弁してください」

瞬間、先生が土下座をして懇願してきた。

「…そこまでイヤなんですか」

「鰐^{わに}よりはマシだよ」

対比物がありえないことになってますよ。

そんなことを考えてる間に梯子を使って先生が降りてきた。

「いやホントの話、ここに毎夜来るのはいいけど無許可はいただけないね」

へらへらと締めりのない顔で真面目なことを言う先生の顔は月明かりに照らされている。

「じゃあどうすればいいですか？」

「ボクが付き添いをしてあげるよ。治療という名目でね」

なるほど。そうすればこうやってわざわざコソコソと屋上まで来なくていいな。しかしこうやって患者に少しでも歩みより、患者のことを考えてるなんて…少し意外だった。いつもへらへらしていつも医師に見えなかったが今の先生は違う。初めてこの人の医師の顔を見た気がした。

「さらにボクは煙草を吸えるから一石二鳥」

…前言撤回。やっぱりただのオッサンだ。

「明日からだから、今日はコソコソ帰りなさい」と言って『名無し』を帰した後、柿谷は新しい煙草に火を付けゆっくりと紫煙を吸い込むと

「彼はもう行ったよ、櫂くん」

柵の向こうに話かけた。

「…何時からバレてた？」

数秒後に返事と共に自らの体を何十本もの包帯で柵の向こうで支えていた櫂が這い上がってきた。

「彼がここに来るのと同時に上がってきた…いや、キミが彼の後ろを堂々としていて彼がボクを見上げた瞬間にそこに移動した」

飄々とした感じに言う柿谷だが顔に表情は全く無かった。櫂の方は

苦々しい表情で柿谷を見据えながら包帯を束ねている。

「しかし包帯つて意外と丈夫なんだね」

「数があればな…そんなことより」

「本当のことを思い出して欲しくない？」

「…俺としてはそっちの方がいい」

「彼は『昔の自分』を思い出したいんだから、ボクはその手助けをしなくちゃいけないんだ。なんたってボクは主治医だからね」

二人ともそこで黙ってしまい夜風の音だけが虚しく聞こえる。

それから十分ほど経ち煙草を吸いきり携帯灰皿に押し込む柿谷が言葉を発した。「とりあえず今日は遅いから帰りなさい、どうせ葵ちゃんに黙って出てきたんでしょ」

そこには元の締めりのない顔をした柿谷がいた。

「ああ、お休み」

櫂は短くそれだけ言っていると屋上からいなくなつた。

食事と『カード』と『敗北』と

それはほのかの一言で始まった。

「鍋やるべ！」

談話スペースにてトランプの途中、ハートの9を出すと同時に大声で言ったほのかをその場にいた全員―俺、志村さん、蜜柑、柿谷先生―が一斉に見た。

「いや、どうやって？」

それにツツコミながら俺はハートの10を出す。

「申請をしとけば何ら問題はないはずだよ」

そう言いながら先生はノータイムでクローバーの5を出した。

「でも材料はどうするんですか？」

蜜柑がスペードの2を出しながら首を傾げる。

「前は職員で何とかしてくれただぜ」

妙なところだけ覚えてる志村さんがスペードのKを出すべき場所にジョーカーを出した。

：スペードのK、俺じゃねえか。

「と言う訳で柿谷先生、御願います」

ハートのJを出しながら頼むほのか。

「人任せかよ」

しょうがなくジョーカーを回収する。志村さんがニヤニヤしてたが無視する。

「分かった、でもボクも参加するからね」

先生はやはりノータイムでダイヤのAを出し、列を完成させた。

「私、鍋って初めてなんですよ」

蜜柑は嬉しそうな表情でハートのQを出す。

「しかしまたなんで夏場に鍋なんだ？」

当然の疑問を問いかけながら志村さんはクローバーの10を出す。
「食べたいから」

さも当然だと言いたげな顔をしながらクローバーの4を出すほのか。……まあいいけど」

クローバーのJ出しながら呟くが……鍋か。前の俺はどうか知らないが別段悪い話じゃないよな。

「何鍋にするつもりなのかな、ハイ上がり」

クローバーのQを出して一番最初に抜けた先生が尋ねる。

「私はボタン鍋がいいです、上がりました」

次いで蜜柑が自身の希望を言いながらスペードのAを出して列を完成させてゲームを抜ける。

「ボタン鍋って何？」

「猪の肉を使った鍋だな」

俺の質問に答えながら志村さんはクローバーの3を出す。

「残念だけど今回ばかりは蜜柑の意見も聞けないよ」

芝居がかった口調でハートの4を出す。

「珍しいな……『蜜柑第一主義』を名乗るお前が譲れないなんて」

出せる札が二つとも手元にあるためジョーカーを出すことが出来ないのので仕方なくハートの3を出しておく。

「そんなに食べたいモノがあるのか？そして上がりだ」

ハートの2を出してゲームを抜ける志村さん。

「ねえ……」

ほのかがにやつきながら話しかけてくる。

「アంతの負けよ」

「……」

その通りだ。俺の手札はジョーカーとクローバーの2。対するほのかは場に出ていない、そして俺が持っていないカードだからクローバーのAとハートのAだ。

「言うことがあるでしょ？」

皆も楽しそうに俺を見て期待してやがる。

「いや……ちゃんと最後まで」

「言いなさい」

「でも…」

「右フック」

「…まいました」

俺って弱いなあ…。

鍋と『暗闇』と『失神』と

翌日、夕食を食べるために俺達はほのかの病室に向かっていた。

「しかし何鍋かくらい教えてもいいと思うんだが…」

「サプライズとかそんなことをしたいお年頃なんだろうよ」

俺の独り言に志村さんは律義にも答えてくれる。いつも思うんだが優しいよな、この人は。

「誉めても何も出ないぞ」

…心まで読むのは辞めてもらいたい。

病室に辿り着いた俺達が見たのは常夜灯だけをつけてカーテンを閉めきった状態の部屋だった。

「やっと来たわね」

「今日は、いや『今晚は』かな」

その中で仁王立ちをしたほのかと椅子に座って医学書を読んでいた柿谷先生がこちらを向いて挨拶(?)をしてきた。適当に返そうとして違和感に気づく。

「あれ？蜜柑はまだ連れてきてないのか？」

ほのかなら俺が連れてくる前に蜜柑を確保(?)していると思って病室に立ち寄っていなかったのだが…。

「蜜柑ちゃんならそのベッドで横になっっていますよ」

見てみれば柿谷先生のいう通り、ほのかのベッドにパジャマのボタンの全開で頬を紅潮させ荒い息をしている蜜柑と目があった。

「み、見ないでください…」

涙目で懇願してくる蜜柑から素早く目を反らすと同時に殺気を感じ、頭を下げる。直後に風切り音と舌打ちが聞こえた。振り返れば案の定、殺意を剥き出しにしたほのかが固く拳を握っていた。

「クロス…！蜜柑の柔肌を見たからには生かしておけない！」

「待て！その前に一つ言わせろ！」

「辞世の句だったら聞いてあげる」

「なんであんな風になってんだよ！？」

「あれは…そう、つまみ食いよ」

「つまみ食い！？」

「小腹がすいたから、我慢できなくて…」

予想以上の変態だったことに引きながら柿谷先生に目配せする。しかし先生はにつこり微笑むと読書に戻ってしまう。

「まあ落ち着け、ほのか」

やっと志村さんが止めにはいつてきてくれた。ほのかは「でも…」と言いながらシャドーボクシングをしながら言う。

「飯の前にコイツの寝顔なんて見たら食欲がなくなるだろ」

「…それもそうですね」

ヒデエ！？…まあ、理不尽な暴力がないだけマシだな。

「それはそうと結局何鍋なんだ？」

その言葉にほのかは待ってましたと言わんばかりの表情をすると「それは…」と少しためて言った。

「闇鍋よ！」

「…ヤミナベ？」

思わず聞き返す。

「そう、闇鍋」

「えっと…それってタワシとか蛙とかよく分からない物が入ってる鍋を暗闇で食べるってことですよね？」

服装を正して何とか起き上がった蜜柑が不安そうに言う。

「アハハ、今回はそんなレベルの高い物を入れてないよ」

「ダシとかは？」

志村さんが訊くと「無難に昆布だよ」とほのかが答える。

どうやら普通（？）の鍋を暗闇で食べるだけのようだ。そう考えると結構面白そうだ。

「では『名無し』から時計回りに取って行ってね。食べきったら次の人が取る、OK?」

『はい』

さて、とうとう始まった闇鍋だが匂いだけでは全く分からない。まあ変な物が入ってないはずだから適当に取るか。おたまでダシと一緒に具を掬い箸でつついてみる。簡単に突き刺さるが、妙に弾力がある。とりあえず崩れないように注意して口まで持っていき、舌にのせる。

「何を取りましたか?」

右から先生の声が聞こえる。俺は顔が見えたらなんとも微妙な表情をしながら答える。

「…野菜ゼリーです」

『……』

暗くても見えなくても分かる。三人が声もなく笑い、一人が呆気に取られた表情をしていることが。

「食べ終わった」

すぐに宣言して次に回す。

「…あ、私ですね」

混乱状態から少し回復した蜜柑が俺の渡したおたまで具を取るが動きが硬い。

「……」

箸でつついているようだが凄く戸惑っているのが分かる。そして覚悟を決めたのか「…いきます!」と宣言して咀嚼する。

「……」

…反応に困っているのか言葉が全くない。

「…蜜柑?」

声を掛けるも反応がない。…いや、反応がないんじゃない。カタカタと微振動をしている。そして全員が異変に気づいたがどうやら遅かったらしく、蜜柑は箸を落とし、動かなくなった。

「蜜柑ー！？」

「だ、大丈夫か！？」

慌てて駆け寄り肩を揺する。その間に誰かが電気をつけた。俺達が見たのは見事に失神した蜜柑と取り皿の中にある…チョコココロネ。

「って何てもん入れてやがる！？」

「食べられるもの」

「鍋に入れて不自然なものだよ！」

鍋も見てもれば菓子類が中を埋め尽くしている。

「だってお菓子って美味しいじゃん」

「『美味しいもの＋美味しいもの』さらに美味しいもの』じゃねえ！」

「そんなことはいいいから、蜜柑を助ける」

おっと、そうだった。余りのインパクトに忘れるところだった。とりあえずほのかに後片付けを命じて蜜柑を内科医に連れて行った。

過去と『少女』と『現在』と

「お腹すいた……」

私は無人島に漂着から何回目か分からない言葉を発した。私を含めて四人いた人達もいつの間にかいなくなつて私だけが船やヘリコプターがこの空の向こうから来ることを願っていた。

「食料：まだあつたかな」

海辺に座りこんで星空を見るのを止めて私はここについて一番初めに建てた小屋に戻る。そしてあとどれだけ食料があるか確認する。海水から作った塩で保存が効くようにしていたお肉があと一塊（といっても私の小さな手に乗る程しかないが）と今朝、何とか手にいれた魚が二尾、そして見たことも無かつた食べられる果物が数個だけ。

とりあえず魚を一尾だけ焼いて持っているナイフで果物を切り分け、食べる。

とりあえず空腹では無くなつたけど、今日はもう動く気が起きない。そのまま大きな葉の布団を被り、床に着いた。

次の日、私は朝から海で魚釣りをしていた。初めはミミズなどの餌を触るのが嫌で他の人に任せていたけど、いなくなつてからは我慢しながらやっている。手作りの釣竿ではあまり魚は釣れない。それでも今日を生きるだけの魚は確保できる。

二尾目を釣り上げ、小屋に戻ろうとして海の向こうで何かが動いたのが見えた。それが船だと確認すると私は急いで火を焚いて声を上げる。気づいてもらえる事を祈り、精一杯声を張る。

しばらくして船がこちらに向かって来るのが見えた。願いが届いたのだ！

そして私は救助された。国に戻った私はすぐに病院に入れられ、精

密検査受けることになった。体には異常は見つからなかったけど私はすぐに別の病院に移された。

そこでは様々な心理テストをした。私は感じたままのことを言った。その度に医師は無表情でカルテに何かを書いていく。

私は「家族に会いたい」と言った。それを聞いた医師は「もう少し我慢してくれ」と言う。早く父さんと母さんと妹に会いたかった。だから私は我慢した。でもいつまで経っても会うことは出来ない。

私は病院を抜けて家に戻った。幸い、家の近くだったので戻れたが、家の中から人の気配はしなかった。鍵が無かったから窓を割って中に入る。部屋を全て見てみるが誰一人としていない。仕方ないから私は病院に戻った。

また私は病院を移された。家から遠い場所だったけど私は我慢した。そこには色んな人がいた。顔中包帯グルグル巻きの男の子、（顔が見えないけど）全く似ていないその妹、記憶が段々失われていく男、そして足がない少女。少女―蜜柑は私の妹に瓜二つだった。私はこれを運命だと思った。私は蜜柑を自分の物にしたかった。でも積極的にアプローチしても蜜柑は私を『友達』としてしか見てくれなかった。私は蜜柑を『妹』として愛しているのに……。『妹』は『姉』に愛されるためにいるのに蜜柑は私を愛してくれなかった。

ある日、新しい患者がやって来た。自分の名前すら忘れてしまった同年代の少年。彼が来て、蜜柑は変わった。何かと『名無し』の話を楽しそうにしてくる。『名無し』と一緒にいるとチラチラと『名無し』を見る。『名無し』が来てから蜜柑は私と二人きりで話すことをしなくなった。

憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、憎い、

[illegible]

でもお腹がすいたから後にしよう。食事は全ての活力だ。そして蜜柑の布団と一緒に寝よう。蜜柑は私の『妹』だって分かせてやるんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2183i/>

月と『名無し』と『病院』と

2010年12月26日14時04分発行